

「わが家の柴犬」

加藤 信

わが家では柴犬を飼っています。愛情たっぷりの飼い主でもないですし田舎なので、車庫の横に繋いでいます。家人が近づけば即座に尾をふり目を輝かせて飛び付いてきますが、食事や散歩以外はあまり彼の相手になっていません。横目に立ち去るときなど飼い主を興ざめしたように見送る姿にはいささか心が残るものです。もちろん彼は相手にされないと、何ごともなかったように元の静かな姿に戻りますが、期待にはしゃぎ、またそのまま沈静する。そんな姿には不満とか愚痴めいた素振りは無くて、「はい、そうですネ。」というような虚心の動作だけです。すると逆にこっちの気持ちにいささか後ろめたさが尾を引くのです。こんなやりとりは日頃何度も繰り返されます。先日も一日家を空けて帰宅すると、気配をとっくに察した彼は全身で喜びはしゃぎ吠えます。繋がれたままで漏らしている自分の糞を踏み付けながら飛びついてくると、思わず「こらっ。」「ダメッ。」と不機嫌になって餌をやるのですが、彼は喜びのままハグハグと餌に専心しています。排便、空腹などという不平顔は何もありません。今の喜びのみです。その姿からは汚い、うるさいといったこっちの感情の空回りを否応なく知らされ、「ほ一か、おまえは救われとるなあ、ええなあ・・・」と思わずつぶやいているのです。たかが畜生ではないのです。目の前の犬に真向きにさせられれば、飼い主の勝手な心の醜悪さ傲慢さが出ているだけです。ああ、おまえにも、育てられているなあと実感させられます。(なむあみだぶつ)。